

# 日本語話者となった在日日系人のライフストーリー ー日本語と母語はいかに選択されたかー

中澤英利子

横浜市立大学大学院生/都市社会文化研究科/横浜市/日本  
nakazawaeriko@gmail.com

キーワード－生活者, 言語環境, スペイン語話者, エスニック集団, 相互扶助

## 論文要旨

これまでは「労働者」あるいは「就労者」として分析されることが多かった成人の在日日系人であるが、本報告は、その移動過程で選択された言語環境に着目することで、生活者として日本社会で生きる実像を検討するものである。本研究の調査協力者の日系人は日本語話者として日本社会で就労し生活しているが、日常生活の場面ごとに、習得した「日本語」と母語である「スペイン語」を効果的に選択している状況が観察できた。日本語は就労と子どもの教育のために活用されるいっぽう、母語環境のコミュニティに家族で参加することで親の言語と文化を資源として活用することができていた。日本で生活する一人の日系人の長い経験を聞き取ることで、出身国に関係なくスペイン語を共通言語とする人々によるエスニック集団での当事者同士の相互扶助の様子を観察することができた。

## 1 はじめに

南米からの就労を目的とする大勢の日系人の来日が始まってから 30 年が経つ。当初の予想以上に定住化が進み、現在は多様な年齢層で構成されるようになった在日日系人の実像を把握する必要に迫られている。日系人を対象とした教育的分野における研究では、これまでは子どもたちの日本語習得・教育機会の保障が課題とされることが多かった。しかし、成人の日系人にとっても日本語習得は切実な課題であったことに変わりはない。樋口 (2019) の調査によれば、日本語の会話能力と求職経路が外国人労働者の雇用形態にもっとも強い影響を及ぼしており、たとえ日本語ができたとしても仕事のほとんどは非正規であるという。

「就労者」としての日系人は、その不安定な雇用形態と移動性の高さに注目されてきたが、ライフステージの変化とともに一地域で定住する「生活者」として日本社会で存在するようになってきている。定住する外国人に対して「包括的な統合政策は存在しない」(梶田ほか 2005: 20) とされる状態は日本社会の課題であり続けているいっぽうで、日本語を習得し、ホスト社会からの支援に頼る弱者としてではなく、求職・就労・生活において「自立した言語話者」(佐々木・鈴木 2010) として生活する日系人も存在する。

本報告は、就労目的に 10 代で来日したペルー人男性 Y の語りをもとに、日本社会の成員となる過程で、求職・就労・生活のために実践された言語使用の経験と、その過程で選択された言語環境を検討するものである。来日時は日本語を話せなかったと語る Y が移動ごとに言語を選択していく過程を追うことで、日本社会の成員となっていく様子を観察することができた。そのいっぽう、母語環境維持に当事者として関与する姿勢も観察でき、これら選択された二つの言語環境をもとに考察を行う。

## 2 研究方法

本研究は桜井（2012）のライフストーリー研究を援用する。この研究は個人が経験を語る行為とその内容を分析するもので、人生全体を視野にいたした回顧を促すインタビューに意義を求める分析法である（小林 2005）。調査協力者 Y に対しては、ペルーから日本への移動と日本国内でのローカルな移動における「それぞれの移動の経験」「日本語習得」「日本語使用」「母語使用」「家族構成の変化」「日本人との関係」などを質問する半構造化インタビューを実施した。そのライフステージの変化とともに選択された言語環境に焦点をあてて課題へのアプローチを試み、一人の日系人の日本での生活世界を、選択された言語をもとに解釈していくことを目的とする。さらに、移民家族のなかで親の言語と文化の第二世代への継承を意味する「選択型文化変容（selective acculturation）」（Portes & Rumbaut 2001=2014）を可能にした Y の家族が参加するエスニック集団におけるの参与観察とあわせて考察を行う。

## 3 結果と考察

Y は日本国内の移動を繰り返して就労を続けてきたが、現在は関東地方の X 市に定住し、2 児の父親となって日本に帰化している。Y の語りには、経済的保障と同時に安全な生活保障を求めたトランスナショナルな移動と雇用確保のためのローカルな移動が蓄積した経験のなかで、自らの日本語習得への努力、さらには子どもの教育のため日本語で情報入手に努めた経験など、生活戦略ごとの言語環境の選択が見られるものとなった。

その過程では、自らが参加するエスニック集団の仲間の支援も受けていた。Y が参加するキリスト教の教会には日系人によるエスニック集団が形成されており、精神的癒しの場としてだけでなく、言語を共通する者同士の情報交換と日本で生活する当事者同士の相互扶助の場として母語環境が機能している様子が観察できた。そこには日本語と母語を選択しながら生きる在日日系人の生活戦略が見られるものとなっていた。

日本で暮らすペルー人は多数派のブラジル人と比較して「日本社会におけるマイノリティのなかのマイノリティ」（三木・沼尻 2012:135）として考察されることもあるが、彼らをスペイン語話者として理解すると、その様相は異なる。中南米出身の日系人が集まる教会は、「学校以外に子どもをサポートする体制がない」（樋口・稲葉 2011:196）とされる日本社会において、スペイン語を共通語としたマルチエスニックな言語文化共同体として機能し、第二世代のスペイン語学習を支援する継承語教育の実践の場ともなっていた。継承語教育だけでなく、在日日系人にとっても深刻な課題になりつつある高齢化問題に集団内で対処する活動も見られた。

それぞれの国から個別に日本に移住してきた日系人にはあるが、スペイン語でコミュニティを形成し、共通する文化的価値観を持つことで出身国を問わない環境が成立していた。「移民家族の親子がともに十分な規模と多様な制度を有する同国人のコミュニティに埋め込まれていること」（Portes & Rumbaut 2001=2014:112）を条件とする「選択型文化変容」ではあるが、「国別」では区分はされない、スペイン語を共通言語とする言語コミュニティとしての機能を評価せざるを得ない。

しかしながら、Y の語りには、日本社会での自らの将来的展望の話題では、日本的就労形態への疲弊感が見られるものとなり、自立した日本語話者として生活してはいるものの、日本社会では自らを他者化する意識も垣間見られた。

## 4 おわりに

移民受け入れ国として多様な語学教育と職業訓練が用意されているヨーロッパ諸国とは違い、就労目的に日本に入国した外国人への支援は厳しいものであった。そのような現実のなか、日本語習得を果たした日系人のライフストーリーを描くことが、結果的に言語を共通する者による母語環境維持への努力と集団内での相互扶助の活動を観察するものとなった。彼らが参加するエスニック集団では「出身国」によって区別されることなく、また彼らには日本社会で「支援される者」「サポートを受ける者」という意識より、共通言語を介して当事者同士で支えあう空間を重視する意識を強く持っているように考察できた。同時に、この調査をとおして、スペイン語の地理的分布の広がりを日本においても確認させられることになった。

日系人もふくめて、日本へ移動してきた人々が日本社会で「生活者」として存在するようになった現在、自らの言語的文化的多様性を維持しようとする彼らの積極的な姿勢への理解が日本社会に求められている。

## 参考文献

- [1] 梶田孝道・丹野清人・樋口直人 (2005) 『顔の見えない定住化』財団法人名古屋大学出版会.
- [2] 小林多寿子 (2005) 「ライフストーリー・インタビューをおこなう」桜井厚・小林多寿子 (編著) 『ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門』第2章, せりか書房, pp.71-128.
- [3] 桜井厚 (2012) 『ライフストーリー論』弘文堂.
- [4] 佐々木倫子・鈴木理子 (2010) 「一研究論文一自立した言語使用者が育つ地域日本語教育一就労を目指す日系人を例に一」『桜美林言語教育論叢』Vol.6, pp.1-16.
- [5] 樋口直人・稲葉奈々子 (2011) 「デカセギと家族 (11) 一日本で育った子どもの日本への帰還・K一家の場合一」『徳島大学社会科学研究所』Vol.24, pp.189-202.
- [6] 樋口直人 (2019) 「労働一人材への投資なき政策の愚」高谷幸 (編著) 『移民政策とは何か一日本の現実から考える』第1章, 人文書院, pp.23-39.
- [7] 三木英・沼尻正之 (2012) 「再現される故郷の祭り一滞日ペルー人の『奇跡の主』の祭りをめぐって」三木英・櫻井義秀 (編著) 『日本に生きる移民たちの宗教生活一ニューカマーのもたらす宗教多元化』第4章, ミネルヴァ書房, pp.115-138.
- [8] Portes,Alejandro & Rumbaut,G,Ruben (2001) Legacies : The Story of the Immigrant Second Generation,The University of California Press.村井忠政訳 (2014) 『現代アメリカ移民第二世代の研究一移民排斥と同化主義に代わる「第三の道」』 明石書店.